

過去の地震から知る、未来の備え ～生き埋めになった人を助けるには

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■おばあさんと折り重なった状態で梁の下敷きになり身動きできなくなった。おばあさんの足が、だんだんと冷たくなっていくのがわかった。(明治村和泉集落(安城市和泉町)早川ミサコさん)

家がつぶれて、私がうつぶせの状態でおばあさんの上に乗ってしまった。おばあさんは「苦しい、苦しい」って言うもんで、下りようと思ったけど、背中に梁が乗って身動きがとれない。

おばあさんは「出しとくれ」って言っただけで、だんだん声がなくなって、おばあさんの足が冷たくなってしまった。あの足の冷たさは、今でも忘れられない。私は鴨居の下で動けず、もうろうとした意識のなかで、屋根を走る足音を聞いていた。結局、救出されたのは、夜が明けてからだった。



絵 阪野智啓

不幸にも家の下敷きになってしまった場合、一刻も早い救出が必要になります。1995年阪神・淡路大震災での神戸市消防局の救助活動を見ると、震災当日に救助された604人のうち生存者は486人(生存率80.5%)、2日目に救助された452人のうち生存者は129人(生存率28.5%)、3日目に救助された408人のうち生存者は89人(生存率21.8%)でした。しかし震災から4日(72時間)が経つと生存率は5.9%、5日目には5.8%と、生存率が激減します。この傾向は外国での災害でも同じで、「生存救出をするためには地震発生後72時間がタイムリミット」(黄金の72時間(Golden 72 hours))とされています。とにかく一秒でも早い救出が必要で、そのためには地域社会の中で組織だって訓練された救助・救出活動が「命を救うカギ」になります。

救助の際には、もう1つ注意点があります。「クラッシュ症候群」(挫滅(ざめつ)症候群)です。手足などが長時間圧迫されることで、筋肉などが損傷したり壊死したりします。それが救出時に圧迫部分が解放され、壊死した部分からカリウム・ミオグロビンなどが体内を巡ることで、最重症では心停止や急性腎不全など突然死することもある症候です。これを回避するには、救出活動の段階から水分補給・輸液療法などの処置をする必要があります。早期救出ができず、長時間圧迫状態の人に対しては「クラッシュ症候群の疑いがあります！」と医療・レスキュー関係者の指示・対応を仰いでください。また、救出後は、意識が清明でもすぐに病院に行くように強制してください。

阪神・淡路大震災では、外傷により入院した2,718人のうち372人(13.7%)がクラッシュ症候群と診断され、そのうち50人(13.4%)が死亡しました。また、クラッシュ症候群の知識が浸透していない中国の四川大地震では多数の人が死亡したと報道されています。私たちは、防災先進国として、過去の教訓を無駄にすることは決して許されません。